

## P-7 時間間隔における時間性とアスペクト性の交わり：韓国語の時間表現を中心に

川畑祐貴（京都大学大学院・博士後期課程）

yuki.kawabata.81@gmail.com

【要旨】「事態の具体的な時間的位置付け」を考えることは本来、時間性の問題に取り組むことを意味する。しかし、実際には時間性だけではなく、アスペクト的性質、具体的には動作様態的な側面への考慮が求められる場合もある。時間間隔に関する表現はその一つである。文法範疇間の関係に関する言及は従来あったが、時間間隔を介した時間性とアスペクト性（動作様態性）に関する検討は多くなかった。そこで本稿では、時間間隔に関する韓国語の表現を対象に時間性とアスペクト性の交わりについて考える。時間間隔を構成する時点として、発話時や事態時、事態の開始時点や終了時点などさまざまあり得るが、kumpang「今し方;すぐ」や ppalli「はやく」、issta(ka)「いて、いてから」などは時制的解釈やアスペクト的解釈を併せ持つ。その根底にあるのは、アスペクト的な事態内関係と時制的な事態間関係の違いを越えて見られる、時間間隔という構造の類似性あるいは抽象的共通性である。事態展開における時間間隔の存在は時間的意味の発生にも影響する可能性がある（例: 副詞 mak）。

### 1. はじめに

「基準時点に対して、事態が具体的にどの程度の時間的位置にあるか」という時間性（temporality）に関する問題を考える際、「時間間隔（temporal interval）」や「時間的遠近（temporal remoteness）」などが考慮すべき要素として浮上する。中でも「時間的遠近」は、2つの時点の位置関係とその時間間隔（時間的距離）に対する遠近性の現れのことを指すが、韓国語の時間的遠近の表示では、遠近ニュアンスの明示性と非直示性の関連が観察される（川畑 2023a, 2023b）。そうした遠近ニュアンスの明示的形式（例: 時間副詞 mak「ちょうど、（～した）ばかり」や kas「（～し）たて、（～した）ばかり」、形容詞 kakkapta「近い」）では、基準時点は発話時点（絶対時制的）に限定されず、その他の参照時点（相対時制的）や事態の開始／終了時点（アスペクト的）であることも許容される。すなわち、「時間的遠近」を通じて時点位置の具体性を示すという時間性の問題においては、時間性だけでなくアスペクト性（aspectuality）も関わりうるということである。なお、時間間隔の長短／遠近表示では、アスペクト的／時制的解釈の別を問わず、共に適用可能な形式も存在するものの（川畑 2023a）、そうした時間性とアスペクト性の交わりに関する分析や指摘は多くはない。

そこで本稿では、韓国語の時間間隔・時間的遠近の表現をもとに、「時間軸における事態の具体的な時間的位置付け」という時間性と「事態の時間的展開様相」というアスペクト性の交わりに着目し、事態の具体的な時間的位置付けにおけるアスペクト的構造の関わりや、時間間隔・時間的遠近表示における範疇横断性（時制的／アスペクト的解釈の許容性）などについて考える。<sup>1</sup>

### 2. 時間構造

#### 2.1. 時制とアスペクト

言語学において「時間」を考える際に想起されるものの一つが時制（tense）であろう。時制は伝統的に、発話時（Utterance Time; UT）や参照時（Reference Time; RT）と事態時（Event Time; ET）との時間的位置関係を規定する（形態的）システムと見られてきた（Reichenbach 1947, Comrie 1985 など）。他方、Klein（1992,

<sup>1</sup> 本稿では韓国語のローマ字表記に S. E. Martin による Yale 式ローマ字表記を用いる。また、用例などの引用に際して引用箇所右下に出典を明記する。なお、特に断りの無い場合は筆者による作例である。

1994) はそうした伝統的な時制観に対して新たな見方を提示した。従来の参照時 (RT) に代えて主題時 (Topic Time; TT) を導入し、時制を発話時 (UT) と主題時 (TT) の関係へと再定義した。主題時 (TT) とは、何らかの発話命題に関して問題とする時点のことである (Klein 1994, 2014)。Klein (1994) の時制理論の新しさは、導入された 3 つの変数のうち、事態時 (ET) と主題時 (TT) を用いることで視点アスペクト (viewpoint aspect) も定義されうるとした点にある (1)。

- (1) Klein (1994) の時制とアスペクト (英語)
- a. 時制 —  $TT < UT$  (past) ;  $TT \subset UT$  (present) ;  $UT < TT$  (future)
  - b. アスペクト —  $ET \subseteq TT$  (perfective) ;  $TT \subset ET$  (imperfective) ;  
 $ET < TT$  (perfect) ;  $TT < ET$  (prospective)

さらに、参照時 (RT) と主題時 (TT) は完全に代替可能な時点ではないため、時制理論においては両者の共存が望ましいことは踏まえつつも (Bohnmeyer 2014)、Klein (1994) の時制理論におけるもう一つの新しさは、相対時制 (relative tense) と視点アスペクトを事態時 (ET) と主題時 (TT) の関係付けとして同一視する可能性について述べた点にあるといえる。そもそも、アスペクト (aspect) とは、時制と並んで時間に関する議論で現れる概念で、事態の内的な時間構成を捉える様々な見方のことを指すが (Comrie 1976: 3)、厳密にはアスペクトの分類は上記の視点アスペクト以外に、動作様態 (Aktionsart) も含む。この動作様態は語彙アスペクト (lexical aspect) と呼ばれ、動詞の内的な時間的性質に関するものである (Vendler 1957 など)。Klein (1994) は上述の通り、相対時制と視点アスペクトの関連可能性については示したが、語彙アスペクト的性質 (dynamicity 動作性、durativity 継続性、telicity 限界性、causal relations 因果関係など) は理論の範囲外としており (Bohnmeyer 2014: 925)、それら性質と時制との関係は課題の一つとして残された。

## 2.2. 時間性とアスペクト性

2.1 節は時制とアスペクトに関する説明であったが、それら概念 (特に時制と視点アスペクト) は文法範疇 (grammatical category) として形態的に表示されやすい。しかし、語彙や構文的表現、あるいは語用論的方法など、時間関係の意味はさまざまな方法で表されうる (Comrie 1985)。本稿では、意味論的により広く実現される範疇として、時制とアスペクトに対応しうる性質をそれぞれ時間性 (temporality) およびアスペクト性 (aspectuality) と呼ぶこととする (工藤 1995 も参照)。本稿は時間性とアスペクト性 (特に動作様態性) との交わりを考えるが、その過程で時点間に跨る時間間隔 (temporal interval) への言及が必要となる。続く 2.3 節で詳説する。

## 2.3. 時間間隔

時間間隔や時間的距離、時間的遠近に関する説明は川畑 (2023a) に詳しい。まず、「時間間隔 (temporal interval)」とは、文字通り、任意の 2 つ以上の時点を隔てる時間的な間隔のことを指す。本稿では、間隔に interval を充てるが、他にも span, stretch, duration, runtime, elapsed time などと表されることもある。特に duration, runtime, elapsed time などは事態の時間的進行というアスペクト的性質を語る際に「持続時間」や「継続時間」の意で使われやすい。ここで考えるべきは、選択される任意の時点がどのようなものであるかということである。先述のように duration や runtime などアスペクト的に用いられる場合は、事態の開始時点や終了時点、事態内部の時点など、事態内関係が問われる。一方、時間間隔が事態間関係に関わる時間性の問題として現れることもある。その場合の時間間隔を便宜的に時間的距離 (temporal distance) と呼ぶ。時

間的距離を扱う際は基準となる時点や、時点間の方向性が重要である (Dancygier and Vandelanotte 2009, Zeman 2015, Meermann and Sonnenhauser 2015)。その方向性は、たとえば基準時点に対する以前／以後や、現在に対する過去／未来として現れる。アスペクト的な時間間隔では事態の展開性を前提とするため、時点間の方向性は事態展開に伴う時間経過の方向性として自ずと説明されうる。なお、そうした時間的距離には遠近の認識や評価が伴う場合がある。それを本稿では時間的遠近 (temporal remoteness) とする。

上記の内容は、時間性とアスペクト性 (動作様態性) が時間間隔という構造を介して範疇横断的に通じる可能性があることを意味する。次節に関わるのは、この時間構造の類似性あるいは抽象的共通性である。

時間的距離や時間的遠近に関して付け加える。時間間隔への関心は事態内部の動作様態に関するアスペクト的議論の中で生じてきたが、時間的距離や時間的遠近は主に時制研究の一環で扱われてきた。1980年代後半から1990年代後半にかけて進展が見られた後 (Dahl 1985, Comrie 1985, Chung and Timberlake 1985, Fleischman 1989, Klein 1994 など)、2000年代後半からこの10数年で分析と理論の精緻化がさらに進んだ (Botne and Kershner 2008, Nurse 2008, Bohnemeyer 2009, Botne 2012, Cable 2013, Bochnak and Klecha 2018, Chamorro 2020, Johnson 2022 など)。時制形式が遠隔性の区別を有する言語はニジェール・コンゴ語群 (アフリカ大陸) やトランスニューギニア語群 (パプアニューギニア)、アメリカ大陸の先住民語などに集中して見られるという地域性がある (Botne 2012: 536, Dahl and Velupillai 2013)。また、時制における遠隔性の区別が共時的または通時的に解消・消滅し、より簡素な体系になる場合もある (Heine 1973, Daniels 2020 など)。この地域性や区別の簡素化は、時間的距離や時間的遠近が通言語的には文法範疇として確立されにくく、延いては語彙的に表されやすいことを示唆する。

## 2.4. まとめ

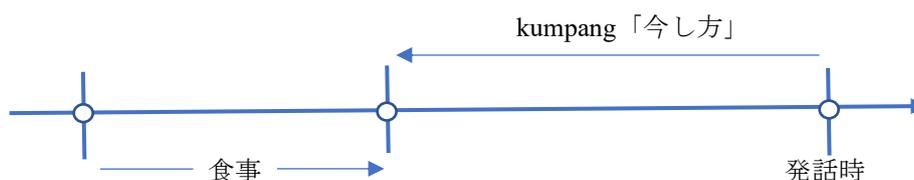
2節では言語学における時間の扱いを概観した。時間間隔において、時間性とアスペクト性の交わりが見られる可能性がある。そこで次節では、韓国語の時間表現からいくつかの例を挙げて実際に考えてみる。

## 3. 時間間隔に関する韓国語の表現

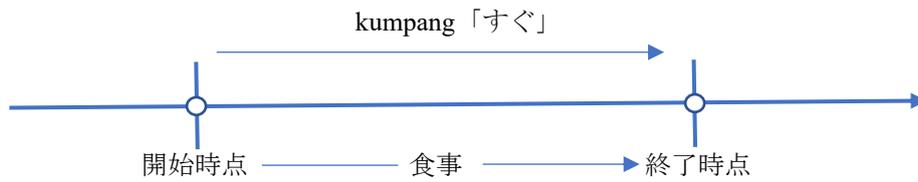
3節では、時間性とアスペクト性の交わりを見せる韓国語の時間間隔表現の例をいくつか提示する。たとえば、時間副詞／名詞の kumpang 「今し方; すぐ」が挙げられる (2)。

- (2) ce-nun kumpang mek-ess-e-yo.  
私-TOP 今し方/すぐ 食べる-PST-IFRM-POL  
「私は今し方、食べました。」 / 「私はすぐに食べました。」 (ボン＝ミギョン 2005: 128)

例 (2) は「今し方」という直示的解釈 (図 1) と「すぐ」という非直示的 (アスペクト的) 解釈 (図 2) を持つ (ボン＝ミギョン 2005, 中村 2009, 川畑 2023b)。2つの解釈では選択される時点の種類が異なるが、時点間の間隔の短さを表す点では共通する。2.3節で述べた「時間構造の類似」とはこうした状況を指す。



<図 1> kumpang の直示的解釈



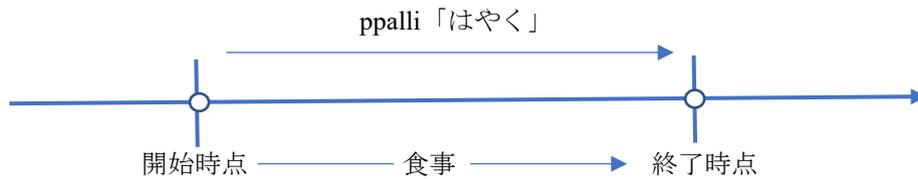
<図 2> kumpang の非直示的 (アスペクト的) 解釈

次に、形容詞に関する例について、形容詞 ppaluta 「はやい」の派生副詞形である ppalli 「はやく」には 2 つの解釈がありうる (3)。

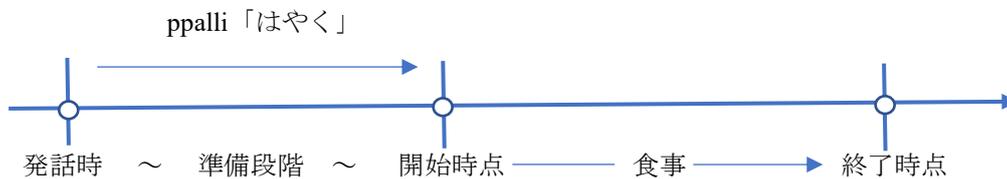
- (3) ppalli mek-e-la.  
 はやく 食べる-IFRM-IMP  
 「はやく食べる。」

(川畑 2023a)

(3) の場合、食事を素早く行ない、その所要時間を短くする場合は事態内の時間間隔に関する非直示的 (アスペクト的) 解釈として理解されるが (図 3)、「はやく食べ始めろ」の意味で理解される場合は発話時点から食事の開始時点までの事態間関係として直示的に解釈されうる (図 4) (川畑 2023a)。



<図 3> ppalli の非直示的 (アスペクト的) 解釈



<図 4> ppalli の直示的解釈

ppalli における時間間隔の短さとは、事態展開の速さに伴って現れる時間的要素である。(3) では、元の形容詞の意味に由来する非直示的でアスペクト的な解釈から事態の動的性質がやや褪色し、時間間隔の短さの表示へと抽象化が進むことで、図 4 のような直示的な解釈も生じうるのではないと思われる。

他にも、存在詞 issta 「いる、ある」に関する例も挙げられる。issta に連結語尾-ta(ka)が後接した iss-ta(ka) に対して (4a)、意味的にも形態音韻的にも類似した itta(ka)という時間副詞が見られる (4b)。

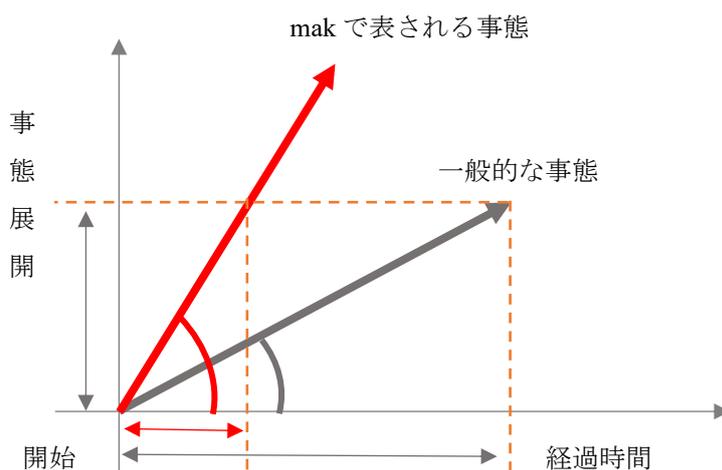
- (4) a. com iss-ta(ka) manna-yo.  
 少し いる-CONJ 会う-POL  
 「少ししてから、会いましょう。」 / 「後ほど会いましょう。」
- b. itta(ka) manna-yo.  
 あとで 会う-POL  
 「後ほど会いましょう。」

(4a) の *issta(ka)* は本来「いて、いてから」という存在状態の持続を表すが、状態持続の意味が薄まり、転じて「あとで、後ほど」という時点位置関係の解釈も表す。(4b) の時間副詞 *itta(ka)* 「あとで、後ほど」は *issta(ka)* の時点位置表示が(通時的に)語彙化したものと推測される。

ここまで、時間間隔に関する表現を観察し、事態内間隔と事態間間隔の表示に共通して適用可能なものが存在することが分かった。なお、事態の展開性とそれに伴う時間的要素の関係は、たとえば韓国語の時間副詞 *mak* 「ちょうど、(～した)ばかり」と様態副詞 *mak(wu)* 「激しく、甚だしく、やたらに、手当たり次第に」の関連性に関する考察にも応用できる可能性がある(ヤン=インソク 1984 も参照されたい)。

- (5) a. *chelswu-ka mak wul-ess-ta.*  
 チョルス-NOM 激しく 泣く -PST-DECL  
 「チョルスが激しく泣いた。」
- b. *yelcha-nun icey mak chwulpalha-yss-ta.*  
 列車-TOP 今 ちょうど 出発する -PST-DECL  
 「列車は今ちょうど出発したところだ。」

(5a) は様態副詞 *mak* によって泣き方の激しさを、(5b) は時間副詞 *mak* を用いて発話時と列車の出発時点の近さを表す。両者の意味は一見関連しないが、図5のように想定すれば、両者の関連も説明される。



<図5> mak が表す事態展開のイメージ

縦軸を事態の展開度合い、横軸を事態の経過時間として、その平面上に *mak* で表される事態と一般的な事態を示すと、図5のようになると考えられる。*mak* で表す事態は一般的な事態に比べ、様態的な激しさや強さを見せる。その激しさや強さは両者の「角度」の差として現れる。その結果、事態の展開度合いが同等であっても、その度合いに達するまでの経過時間は *mak* の事態のほうが短くなる。(5b) の時間副詞 *mak* の時間的近さのニュアンスは、そうした *mak* が示すアスペクト的な時間間隔の短さに由来するのではないかと考えられる。つまり、時間間隔に関する意味が抽象化し、事態内関係から事態間関係の表示へと転じた可能性が挙げられる。なお、この考察には通時的検証も要求されるが、本稿では扱わず、可能性の指摘に留める。

## 5. おわりに

時間間隔への関心はおおよそ事態内部の動作様態に関するアスペクト的議論の中で生じてきたが、当然ながら時間間隔は事態間の関係としても存在する。本稿は、そうした事態間の時間間隔にも注目し、事態展開

とその時間的側面の関係から時間性とアスペクト性の交わりについて考えた。同一の形式が時間的解釈とアスペクト的解釈を備える場合、そこに関与するのは時間間隔という構造を持つ範疇横断的側面である。

なお、本稿では時間間隔に関する韓国語の表現をいくつか取り上げたに過ぎない。事態展開とその時間的要素の関係をさらに分析、考察するためには、扱う表現や形式の範囲を広げる必要がある。また、韓国語以外の言語における実態を調べることで通言語的な検討が可能となる。それらは今後の課題とする。

#### 【謝辞】

本稿の作成にあたり、定延利之先生、千田俊太郎先生、Adam Catt 先生、大竹昌巳先生、徐敏徹先生、ならびに葉晨傑氏、韓旻池氏、王丹氏から有益なコメントをいただいた。記して感謝申し上げる。本稿に残る不備は全て筆者の責に帰すものである。

#### 【略号一覧】

CONJ: conjunctive; DECL: declarative; IFRM: informal; IMP: imperative; NOM: nominative; POL: polite; PST: past; TOP: topic

#### 【参考文献】

- Bochnak, M. Ryan and Peter Klecha (2018) Temporal remoteness and vagueness in past time reference in Luganda. In Jason Kandybowicz, Travis Major, Harold Torrence and Philip T. Duncan (eds.) *African linguistics on the prairie: Selected papers from 45th Annual Conference on African Linguistics*, 377–391. Berlin: Language Science Press.
- Bohnmeyer, Jürgen (2009) Temporal anaphora in a tenseless language. In Wolfgang Klein and Ping Li (eds.) *The Expression of Time*, 83–128. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Bohnmeyer, Jürgen (2014) Aspect vs. relative tense: the case reopened. *Natural language and linguistic theory* 32: 917–954.
- ボン = ミギョン [봉미경] (2005) 「시간부사의 어휘 변별 정보 연구 -유의어 「방금」 과 「금방」 의 분석을 중심으로-」 『외국어로서의 한국어교육』 30: 112–139. [時間副詞の語彙辨別情報研究－類義語「방금」と「금방」の分析を中心に]
- Botne, Robert (2012) Remoteness Distinctions. In Robert I. Binnick (ed.) *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*, 536–562. Oxford: Oxford University Press.
- Botne, Robert and Tiffany L. Kershner (2008) Tense and cognitive space: On the organization of tense/aspect systems in Bantu languages and beyond. *Cognitive Linguistics* 19(2): 145–218.
- Cable, Seth (2013) Beyond the past, present, and future: Towards the semantics of ‘graded tense’ in Gikūyū. *Natural language semantics* 21(3): 219–276.
- Chamorro, Pilar (2020) Past temporal reference and remoteness distinctions in Guajajára. *International Journal of American Linguistics* 86(3): 331–365.
- Chung, Sandra and Alan Timberlake (1985) Tense, aspect, and mood. In Timothy Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description, vol.3, Grammatical categories and the lexicon*, 202–258. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Comrie, Bernard (1985) *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dahl, Östen (1985) *Tense and aspect systems*. Oxford: Basil Blackwell.
- Dahl, Östen and Viveka Velupillai (2013) The past tense. In Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath (eds.) *WALS Online* (v2020.3) [Data set]. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.7385533> (Available online at <https://wals.info/feature/66A#2/26.7/149.1>, Accessed on 2024-05-05.)
- Dancygier, Barbara and Lieven Vandelanotte (2009) Judging distances: mental spaces, distance, and viewpoint in literary discourse. In Geert Brône and Jeroen Vandaele (eds.) *Cognitive poetics: Goals, gains and gaps*, 319–369. Berlin/New York: de Gruyter.
- Daniels, Don (2020) The history of tense and aspect in the Sogeram family. *Journal of Historical Linguistics* 10(2), 167–208.
- Fleischman, Suzanne (1989) Temporal distance: A basic linguistic metaphor. *Studies in Language* 13: 1-50.
- Heine, Bernd (1973) *Pidgin-Sprachen im Bantu-Bereich* (Kölner Beiträge zur Afrikanistik, 3). Berlin: Dietrich Reimer.
- Johnson, Kimberly (2022) Time and evidence in the graded tense system of Mvskoke (Creek). *Natural Language Semantics* 30: 155–183.
- 川畑祐貴 (2023a) 「韓国語の時間的遠近の表現方法について：時点位置と時間間隔の関係性」朝鮮学会第 74 回大会口頭発表. 天理大学, 2023 年 10 月 8 日.
- 川畑祐貴 (2023b) 「時間的遠近の強調的表示について：朝鮮語の時間語彙を中心に」『京都大学言語学研究』42: 77–99.
- Klein, Wolfgang (1992) The present perfect puzzle. *Language* 68: 525-552.
- Klein, Wolfgang (1994) *Time in language*. London: Routledge.
- Klein, Wolfgang (2014) Is aspect time-relational? Commentary on the paper by Jürgen Bohnemeyer. *Natural language and linguistic theory* 32: 955–971.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテクストー現代日本語の時間の表現ー』東京：ひつじ書房.
- Meermann, Anastasia and Barbara Sonnenhauser (2015) Distance: Between deixis and perspectivity. In Barbara Sonnenhauser and Anastasia Meermann (eds.) *Distance in languages. grounding a metaphor*, 37–66. Newcastle Upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- 中村麻結 (2009) 「類義関係にある時間副詞についてー방금と금방ー」油谷幸利先生還暦記念論文集刊行委員会 (編) 『朝鮮半島のことばと社会ー油谷幸利先生還暦記念論文集』56-103. 東京: 明石書房.
- Nurse, Derek (2008) *Tense and aspect in Bantu*. New York: Oxford University Press.
- Reichenbach, Hans (1947) *Elements of symbolic logic*. London: Macmillan.
- Vendler, Zeno (1957) Verbs and times. *The philosophical review* 66: 143–160.
- ヤン=インソク [양인석](1984) 「막말로 맨 헛소리만」『어학연구』20(1): 45–49. [韓国語の語彙素 mak と mae n の意味]
- Zeman, Sonja (2015) The elementary particles of distance in space, time, grammar, and discourse. In Barbara Sonnenhauser and Anastasia Meermann (eds.) *Distance in languages. grounding a metaphor*, 7–36. Newcastle Upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.